

# トーマス・シュタンゲルの 『唯一の場所』と「記号の山での旅」

— シュタンゲルとドゥルーズ、アルトー、脱構築理論について —

副 島 美由紀

## 1. 華麗で静かなデビュー

オーストリア現代文学の作家、トーマス・シュタンゲルのデビュー作である『唯一の場所』<sup>1</sup>は、2004年の発表当時ドイツ語圏の様々な書評において異口同音に絶賛され、<sup>2</sup> またその年のデビュー作の中で最も優秀な散文作品に与えられるアスペクテ賞を受賞した作品である。<sup>3</sup> 一見華麗なデビューを飾ったかのように見えるが、ドイツ書籍賞 (Deutscher Buchpreis) の候補作になることはなく、雑誌のベストセラー・リストに載ったりもせず、著者がメディア上で話題になることもなかった。同じオーストリアの若手作家であるクレメンス・ゼッツが“天才”と持て囃され、三度もドイツ書籍賞候補になった上にライプツィヒ書籍見本市賞を受賞し、さらに2016年末までに二度も来日しているのとは対照的である。振り返ってみるとシュタンゲルの登場はやはり静かなデビューであったと言わざるを得ない。しかしそれでも著名なゲルマニストで元ベルリン自由大学およびフンボルト大学教授のクラウ

<sup>1</sup> Thomas Stangl: Der einzige Ort. Graz-Wien 2004. 引用箇所は括弧内のアラビア数字により本文中に表記する。

<sup>2</sup> Vgl: Tilman Spreckelsen: Thomas Stangl: „Der einzige Ort“ In: FAZ, 24.03.2004; Olga Martynova: Das Rauschen des Sandmeeres in Wien. In: Die Zeit, 24.07.2004; Karl-Markus Gauss: Timbuktu sehen. In: Süddeutsche Zeitung, 28.07.2004, usw.

<sup>3</sup> <<http://www.literaturpreisgewinner.de/belletristik/aspekte-literaturpreis>> [Abruf.20.08.2016]

ス・シェルペをして、ポストモダン探検文学の中で「最も興味深い」<sup>4</sup>作品と言わしめ、批評家から「並はずれた知性」による「想像力を超える」作品という賛辞を受けた<sup>5</sup>『唯一の場所』は、やはり大きな存在と言うべきだと思われる。否、そのスケールの大きさと物語の面白さ、そして深い思弁性を思うと、それは極めて大きな存在と言うべきではなかろうか。オーストリアのある批評家は、シュタングルのことを「最近のドイツ文学は垣根に護られた小さな体験世界の庭の芝生を世話しているようなもの、という考えを覆してくれる男」<sup>6</sup>と評しているが、これはやはり大きな役割である。

しかし『唯一の場所』があまり論考の対象となることがないのは、P. ランガーが言うように確かに驚くべきことではあるが、<sup>7</sup>それは彼女も推測する通り読解が決して容易ではないことに原因があるだろう。その難解さにはいくつかの要因がある。まずは複雑な文体である。一つの文章は常に関係文や挿入文の多用によって伸長され、直線的な読みを困難にする。句点から句点までは十数行にも及び、しかも語りのパースペクティブも複数存在する。C. ギャーツの言う「厚い記述」<sup>8</sup>を想起させるこの多層的な事物の描写は、未知の文化圏への進入という主人公たちの体験を物語るには有効な方法ではあるが、気の短い現代の読者を引き留めておくのは困難であろう。また作品中には4種類の物語が存在し、それらが交互に入れ替わって筋書きが進行するため、作品全体の理解のためにはそれぞれの物語の関係をも理解する努力

<sup>4</sup> Klaus R.Scherpe: *Techné und Poiesis. Die Entdeckung wissenschaftlicher und poetischer Verfahren der Reisebeschreibung* In: *Acta Germanica*. Vol.42. 2014, S.23.

<sup>5</sup> Roger Willemsen: Zitiert nach Patricia Langer: *Eine philosophische Exkursion: Poststrukturalistische (Denk-) Muster in Thomas Stangls „Der einzige Ort“*, Marburg 2008, S.6.

<sup>6</sup> Anton Thuswaldner: Zit.nach der Internetseite des Literaturverlags Droschl: < <http://www.droschl.com/autoren/page/4/>>[Abruf.20.08.2016]

<sup>7</sup> Patricia Langer: *Eine philosophische Exkursion: Poststrukturalistische (Denk-) Muster in Thomas Stangls „Der einzige Ort“*, Marburg 2008, S.6.

<sup>8</sup> クリフォード・C. ギャーツ (吉田禎吾他訳)『文化の解釈学 I』(岩波書店 1987), 10ff.

が必要とされる。そしてこの作品の個別的な特徴として、作品全体がポスト構造主義の思想、特に脱構築理論を体現しているのである。そしてこの作品の魅力と困難さとは表裏一体を成している。従って本論は作品の難解さ、特に脱構築理論との関係に焦点を当て、小説『唯一の場所』を解説するものである。それは結果としてこの作品の魅力をより鮮明に語る作業になるはずである。

## 2. 四層の物語

『唯一の場所』は概説的に言うなら、1820年代にサハラ砂漠の町トンプクトゥを訪れた二人のヨーロッパ人の物語である。この頃のトンプクトゥはイブン・バトゥータの著作や渡英したモロッコ人の語りによってヨーロッパに紹介されたばかりであり、「黄金を敷き詰めた街路や水晶で出来たパゴダの町」(394)といった誇張された表現によってその“幻の町”、“夢の町”としてのイメージが増殖されていた。<sup>9</sup> よって当時まだ誕生したばかりのフランスとイギリスの地理学協会は、野心的な探検家を派遣して幻の町発見の名誉を獲得しようとする。この時イギリスが派遣したのは、イギリス軍少尉のアレクサンダー・ゴードン・レイン (Alexander Gordon Laing) だった。すでにシエラレオネ探検の経験があったレインは植民地省の委託を受けてアフリカへ赴く。大英帝国の使者として地元の族長らの援助を受けたレインは、1826年にヨーロッパ人として初めてトンプクトゥ探訪に成功するが、当時レインの20年程前にアフリカ探検を行ったムンゴ・パークの時代から蓄積されていたキリスト教徒に対する反発が増大しつつあり、結局レインはキリスト教徒の侵入阻止を図るイスラム勢力の襲撃を受け砂漠で横死してしまう。他

<sup>9</sup> E.W. Bovillによると、実際には15世紀頃にトンプクトゥを訪れたイタリア人やポルトガル人がいたが、自ら記録を残したわけではなかったという。E.W. Bovill (ed.): *The journal of Friedrich Hornemann's travels from Cairo to Murzuk in the years 1797-98; The letters of Major Alexander Gordon Laing, 1824-26.* Cambridge 1964, S.180.

方、フランスから赴いたのは軍人でも学者でもない一介の労働者だったルネ・カイエ (René Caillié) である。孤児でパン屋の見習いであったカイエは幼少期から探検に憧れ、16歳で単身アフリカへ渡る。そしてセネガルで賃金労働により資金を作り、独力でトンブクトゥへの旅に出る。彼はアラビア語や地元の言語を学び、またキリスト教徒に対する原住民の反感にも慎重に対処した。つまり“奴隷としてフランス人に仕えていたエジプト人のアブラ”としての偽装を貫徹することにより、主にイスラム教徒である原住民たちの共感を勝ち得る。そしてレインの死から2年後の1828年に地元の隊商に随伴してトンブクトゥを訪問し、さらにサハラを縦断して同年無事にフランスに帰還するのである。作品は「歴史上最も軽視されているアフリカ探検家」<sup>10</sup>と呼ばれるレインと、「最も風変わりな探検家」<sup>11</sup>と言われるカイエを同列の主人公とし、全能の語り手が二人の探検を時系列に沿って交互に物語るという構成を取っている。その際彼らが残した記録文書に基づきながらも虚構の要素を多分に加味し、それぞれ性格も旅の手法も異なる二人の主人公を異なる文体によって描き分け、説得力のある探検家像を作り上げている。

そしてさらにこの作品を特別なものにするのは、以上の二人の物語に加えてさらに二つの歴史物語が存在することである。そのうちの一つはアフリカ人によって伝承されたアフリカ史の物語である。サハラ地域には8世紀頃からガーナ帝国、マリ帝国およびソンガイ帝国のイスラム諸王国が興っており、これらの歴史が口承伝達者であるグリオの謡によって伝えられていた。そしてガーナ人の歴史家であるD. T. ニアネが1960年にグリオの謳を採録して叙事詩集を編纂し、<sup>12</sup> また西アフリカ史の研究書も著わしている。<sup>13</sup>『唯一の

<sup>10</sup> Ebd., S.125.

<sup>11</sup> Galbraith Welch: The unveiling of Timbuctoo. (Neuaufgabe) New York 1991, S.12.

<sup>12</sup> Djibril Tamsir Niane: Soundiata ou l'épopée mandingue. Paris 1960.

<sup>13</sup> Niane: Recherches sur l'Empire du Mali au Moyen. (Recherches Africaines. No. 1), janvier 1959. (AgePrésence Africaine, 1975); Ders./Jean Suret-Canale: Afrikanisches Geschichtsbuch. Geschichte Westafrikas. Darmstadt 1963.

場所』の語り手はこれらの歴史書に依拠しつつ、グリオのナラティヴによってマリ帝国を中心にしたサハラ諸国の概史を再現する。黄金と塩の交易により栄えたこれらの帝国の歴史と王たちの闘争の年代記は、恐らく大抵のヨーロッパ人にとってはまさに想像力を超える未知の領域であろう。

そして二番目の歴史物語はヨーロッパ人によるアフリカ・ディスコースの歴史である。このアフリカ・ディスコースをE. サイドに倣ってアフリカニズム<sup>14</sup>と呼ぶとすれば、この歴史はアフリカニズム概史と呼べるだろう。ヨーロッパは古代ギリシャのヘロドトスの時代からアフリカについての関心を示してきたが、『唯一の場所』の語り手は何らかのかたちでアフリカに関わる記述を行ったヨーロッパ人、例えばリンネやフロベニウスらの学者たちやヴェルギリウス、ボルヘス、ミシェル・レリスらの文人たちの計20名に言及し、彼らが行った記述を紹介しつつ約三千年にも及ぶアフリカニズムの歴史を顕在化させる。この二種の歴史物語を背景としてレインとカイエの二人の探検が行われると合計4層の物語が出来上がり、それらが部分に分割されて交互に語り継がれるのである。それはあたかも二つの歴史記述を縦糸に、二人の探検談を横糸にして壮大な歴史織物を織るかのようであり、それがシュタンゲルの思弁のかつ表現豊かな文体によってまさに「分厚い織物」<sup>15</sup>のような作品に仕上がっているのである。

### 3. 塊茎か樹木か？

『唯一の場所』を一読すれば恐らく、作者のシュタンゲルが脱構築理論に関する修士論文によって学位を得たという事実を仮に知らずとも、作品がポ

---

<sup>14</sup> エドワード・W. サイド（大橋洋一訳）『文化と帝国主義1』（みすず書房1998）、112頁。

<sup>15</sup> Thomas Stangl: »Black speck amid a waste of dreary sand...« In: Christof Hamann/Alexander Honold (Hg.): *Ins Fremde schreiben: Gegenwartsliteratur auf den Spuren historischer und fantastischer Entdeckungsreisen*. Göttingen 2009, S.269.

スト構造主義の理論によって裏打ちされていることに気付くであろう。従ってスイスのP. ランガーはこの作品が探検文学であると同時に哲学的余論でもあるとし、『哲学的余論：トーマス・シュタンゲルの『唯一の場所』におけるポスト構造主義的（思考）パターン』<sup>16</sup>という研究書を著している。その際彼女は主にJ. ドゥルーズおよびドゥルーズ／ガタリの著作を参照にしており、『唯一の場所』の物語がリゾーム（塊茎）構造を成していると主張している。<sup>17</sup> その根拠として挙げられているのは、主人公たちの旅が言わばノマド的な旅である点や、作品の中に『千のプラトー』で使用されている「層」や「崩壊」その他の語彙が使われているといった点である。<sup>18</sup> 作品が四層の物語から成るような複雑な構成の小説においては、一見すると様々な語りの部分的要素を統べるような構造は存在せず、それぞれの筋の要素が他の筋の要素と連結関係にあるかのように見えるかも知れない。しかしそれがリゾーム的であるというのは筆者の考えによるとあまり意味のない言明である。なぜなら上記の四つの物語はそれぞれ時系列に沿って進行し、交互に語られてはいてもそれぞれ互いに接点を持つことなく経過していくからである。アフリカニズムはサハラ諸王国概史について殆ど理解することなく進行し、作品の末尾において人種主義のイデオロギー発揚の場に変質する。例えばまず1839年に、イギリスで出版されたジェームズ・カウルズ・プリチャードの『人種の滅亡について』<sup>19</sup>が、アフリカ人は「過去もなく未来も持たぬ」人種であり「絶滅する運命にある」（399）と説く。以降、エミン・パシャやカール・ペーターズ、ベルギーのレオポルド2世といったアフリカに厄災をもたらしたヨーロッパ人たちや、50万から80万と言われる死者を出したコンゴ自由国での暴政やドイツ領南西アフリカにおけるジェノサイドに関する記述が続く。アフリカ概史が集团的幻想としてのアフリカニズムを照射することに

<sup>16</sup> Langer: Eine philosophische Exkursion. (注7参照)

<sup>17</sup> Ebd., S.21ff.

<sup>18</sup> Ebd., S.28.

<sup>19</sup> James Cowles Prichard: On the Extinction of some Varieties of the Human Race. 1839.

よって植民地主義がアフリカ史にとって謂われもなく到来したことの不当さと誤謬性が顕著になり、それがこの作品のポストコロニアルなディスコースの一面を形成している。また、“夢の町”であったトンプクトゥの実際の姿にレインは強く印象づけられ(321)、カイエは泣きたいほど失望するが(312)、二人の印象の違いとその要因は、二人の物語がこの町に到達した時点でのみ交差することによって際立つように構成されている。従って作品は物語の「どの1点も他の1点と接続される」<sup>20</sup>といったリゾーム状態を成しているとは決して言えない。その構造はむしろ、リゾームの対局とされ、生成軸に沿って組織化されるような樹木<sup>21</sup>に似通っていると言えよう。しかしいずれにせよこのような比喩にはあまり意味があるとは思われない。重要なのは、上記の4種類の物語の流れとその関係性（あるいは関係性の無さ）を把握することである。確かに作品中には、旅の途上で繰り返される行為を「シリーズ (Serie)」(セリー)と呼んだり、<sup>22</sup> 自分の地理的な位置を同定する探検家の能力を「機械」と呼んだりする<sup>23</sup>ことに表れているように、ドゥルーズが使用する語彙の援用も時折見られるが、作品全体の構成に影響を与えるものではない。一方、作品に頻繁に登場し、全体の構成に関わる語彙が存在する。「空虚」と「反復」であるが、以下においてこれらがどのように使用され、どのように作品の構成と関連しているかを検証していく。

#### 4. 「記号の山」での遊技

『唯一の場所』において、「空虚 (Leere)」(あるいは「空所 (Leerstelle)」)

---

<sup>20</sup> ジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリ (宇野邦一他訳) 『千のプラトー』(河出書房新社 1994), 19頁。

<sup>21</sup> 前掲書, 24頁。

<sup>22</sup> 参照: ジル・ドゥルーズ (岡田弘/宇波彰訳) 『意味の論理学』(法政大学出版局 1987)

<sup>23</sup> 参照: ジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリ (市倉宏祐訳) 『アンチ・オイディプス』(河出書房新社 1986)

と「反復 (Wiederholung)」という二つの語彙は、名詞としてのみならず“反復する”という動詞や“空虚な”という形容詞としても使用され、反復的に登場する。例えば以下の引用部の様に、一つの文章に同時に登場する場合もある。

一つの町が後にしてきた町に取って代わり、ある人物が別れて来た人物と交代する、それぞれの出会い、それぞれの関係、それぞれの場所がカイエにとっては反復のように思われる。その関係は緊密になったり失われたりもする、そんな風にして彼は解放感を味わうことも出来る、それは彼が将来最終的な空虚の瞬間まで何度も反復して行こうであろうことなのだが、つまり彼は自分の持つ不安をより大きな不安と交換してしまい、交換の瞬間だけ開放感を味わうのである。(80) (傍点筆者)

「空虚」という語は上記の「最終的な空虚」のように「死」の同義語としても使われ、また砂漠で前進を阻まれる時の「空虚」、祈りの際に心を満たす平安としての「空虚」等、様々な場面において使用されている。「彼が持てる一つにして唯一の信仰は空虚という概念」(296)である、といったレインについての記述もある。しかしこの作品において特徴的なのは、通常の意味合いを逸脱した使用法、例えばトンプクトゥの町を「すべての言葉の動きの空虚な中心」(150)と呼ぶ時の用法である。トンプクトゥの名称についても、その「名前を巡る網目の中心には、一つの空虚が、不在の場所が、あらゆる征服の下にそれを逃れる何かが存在する」(174)とされる。またカイエについては、その「体験(知覚においても記憶においても思考においても)と結びついている場所は、空所のまま」(132)である、といった記述がなされる。このような一種不可思議な「空虚」及び「反復」が頻繁に登場するため、読者は時折作品の背後に不可視の迷路が存在するかのような感覚に捕らわれる。このような言葉の用法のうち、まずは独特な「空虚」の内容を理解するために、シュタングルが『唯一の場所』の執筆に取りかかった頃に発表したエッセイを振り返ってみたい。



シュタンゲルは1994年に、メキシコ旅行を行った際の体験について「記号の山での旅」<sup>24</sup>というエッセイを發表している。この時のメキシコ旅行はシュタンゲルにとって初めてヨーロッパの外に出る旅であった。<sup>25</sup> 大学で哲学と並んでイスパニア学を専攻した彼にとって、旅の目的地としてのメキシコは自然な選択であったかも知れない。が、「今から60年ほど前、アントナン・アルトーは、閉鎖的で西洋文明に殆ど順応していないインディオたちが住むメキシコ北西部の到達困難な山岳地帯を訪れた。」<sup>26</sup> という記述で始めるこのエッセイを読むと、シュタンゲルのメキシコ旅行の目的はこの「到達困難な山岳地帯」であるタラフマラ山地の訪問にあったと推測される。表題にある「記号の山」とは、アントナン・アルトーがメキシコのタラフマラ山地に与えた名称であり、アルトーが1936年にタラフマラを訪れた際に執筆されたエッセイ集『タラユマラ』<sup>27</sup>の中にも、「記号の山」と題された小品が存在する。<sup>28</sup> そしてシュタンゲルのアルトーに対する関心も、彼の修士論文のテーマを考えてみればある程度は納得のいくことである。アルトーは、フーコー、ドゥルーズ／ガタリ、デリダ、トドロフ等、ポスト構造主義の思想家たちが競うようにして論じている対象である。しかしシュタンゲルはどのような認識関心を持ってタラフマラ山地に赴いたのであろうか。

「記号の山での旅」の冒頭では、アルトーがメキシコ大学で行った講演の原稿である「演劇と神々」の中から以下の部分がモットーとして引用されている。<sup>29</sup>

メキシコが生み出すすべてのものを感じるために、その風景のなかをそれ

<sup>24</sup> Thomas Stangl: Reisen im Gebirge der Zeichen. In: ders.: Reisen und Gespenster. Graz-Wien 2012. 初出は雑誌「Wespennest 97」(Wien, 1994)

<sup>25</sup> Zeitschrift Info-AMPAL, Nr.22, 2010, S.26. <[http://www.ampal.org/vieja/images/files/info-ampal\\_nr22.pdf](http://www.ampal.org/vieja/images/files/info-ampal_nr22.pdf)>[Abruf 20.08.2016]

<sup>26</sup> Stangl: Reisen im Gebirge der Zeichen, S.17.

<sup>27</sup> アントナン・アルトオ (伊東守男訳) 『タラユマラ』(ペヨトル工房 1981)

<sup>28</sup> アルトオ: 「記号の山」, In: 前掲書, 46-51頁。

<sup>29</sup> Stangl: Reisen im Gebirge der Zeichen, S.17.

ほど遠くまで進む必要はない。それは、秘教的生を我々に差し出し、しかも、それを生の表層において差し出す、地球上の唯一の場所なのだ。<sup>30</sup>（傍点筆者）

このエッセイが発表された1994年は、前述のようにちょうどシュタングルが『唯一の場所』の執筆を始めた頃である。この作品のタイトルが上記のアルトーの引用から援用されたのだとすれば、当然ながらアルトーの「演劇と神々」とシュタングルの『唯一の場所』との内容的な相似性に関心が及ぶ。なぜならアルトーのエッセイにおいてもやはり「空虚」という概念が重要な役割を果たしているからだ。

「演劇と神々」においては、まず「空間」という概念について語られる。「空間」はアルトーにおいては文化が生まれる場所を意味している。彼は「真の文化は、空間のなかでしか習得されえない」とし、「空間の中の文化とは(...)精神の文化のこと」<sup>31</sup>であると言う。そしてこの「真の文化」とは、「絶えず呼吸し、空間のなかで生きていることを感じつつけている」<sup>32</sup>演劇のような時空間芸術のことである。次に彼は「輪の動きを可能にするのは、真ん中にある空虚なのだ」という老子の『道德経』を引用し、空間の中心地点を「空虚」と呼ぶ。<sup>33</sup> よってアルトーにとって「空虚」は空間の中心であり、時空間芸術のような文化において精神が通過する中心地点なのである。彼にとってそれは「形而上学的観念」なのであり、その考えは例えば「文化とは、空虚から形へと向かい、形から空虚の中へ、ちょうど死に戻るように空虚のなかへと戻る精神の運動なのだ」<sup>34</sup>といった命題の中に表れている。そして時

<sup>30</sup> アントナン・アルトー（高橋純/坂原眞理訳）「演劇と神々」、In: 同著者『革命のメッセージ』（白水社 1996）58頁。傍点部は同書の訳文では「唯一の土地」となっているが、この箇所のドイツ語訳ではシュタングルの『唯一の場所』と同じ単語が使用されているため、ここでは「唯一の場所」とした。

<sup>31</sup> 前掲書、52頁。

<sup>32</sup> 前掲書、52頁。

<sup>33</sup> 前掲書、53頁。

<sup>34</sup> 前掲書、53頁。

空間芸術家であるアルトーにとって、「文化は書かれない」<sup>35</sup>ものである。「言葉が書きとめられたその日から、思想は墮落したのだ」<sup>36</sup>というプラトンの言原を引用するアルトーは、上記のような形と空虚の間の往復運動としての文化しか知らなかった古代メキシコ人の中に「純粋な民族」<sup>37</sup>を見て形而上学の再生を切望するが、このようなアルトーは、デリダによって『《この哀れなアントナン・アルトー氏》』<sup>38</sup>と揶揄されてしまう。ではシュタンゲルはアルトーの言う精神的文化の中心に立つためにメキシコを訪れたのだろうか。

「記号の山での旅」は25頁ほどの短いエッセイであるが、シュタンゲルはそこで約60年前のアルトーの旅の軌跡を確認しながら自らの旅の様子を記録する。その際彼はフーコーのようにアルトーの狂気に着目したりはしない。<sup>39</sup>またトドロフのように、自らが見たい物のみをメキシコに求めたと言ってアルトーを非難したり<sup>40</sup>もしない。ドゥルーズ／ガタリのように「器官なき身体」に拘泥したりもせず、<sup>41</sup> デリダのように、テキストと身体の違いがないことを願ったアルトーを否定的サンプルとして扱ったり<sup>42</sup>もしない。またル・クレジオのように、アルトーが本当に病を押してタラフマラ山地を訪れたのか<sup>43</sup>を問うこともない。シュタンゲルはタラフマラ山地で、不思議な形の岩や異教的な雰囲気の間々、つまりアルトーをも魅了したこの地域の特異な風景を目の前にして、それを自分の言葉で描写したり、逆に頭に浮かんだ言葉を風景として想像してみたりという「遊び」<sup>44</sup>を行っているのだ。そ

---

<sup>35</sup> 前掲書, 54頁。

<sup>36</sup> 前掲書, 54頁。

<sup>37</sup> 前掲書, 54頁。

<sup>38</sup> ジャック・デリダ (若桑毅他訳) 『エクリチュールと差異 下』 (法政大学出版局 1977), 20頁。

<sup>39</sup> ミシェル・フーコー (田村俣訳) 『狂気の歴史』 (新潮社 1975)

<sup>40</sup> ツヴェタン・トドロフ (小野潮/江口修訳) 『われわれと他者』 (法政大学出版局 2001), 529ff.

<sup>41</sup> ドゥルーズ／ガタリ 『千のプラトー』, 182ff.

<sup>42</sup> デリダ 『エクリチュールと差異 下』, 13頁。

<sup>43</sup> ル・クレジオ (望月芳郎訳) 『メキシコの夢』 (新潮社 1991), 241頁。

<sup>44</sup> Stangl: Reisen im Gebirge der Zeichen, S.26.

れはアルトーが約60年前に「記号の山」において行ったことと殆ど等しいように見える。シュタンゲルがタラフマラ山地に抱いていた関心も、アルトーの場合のように、風景と言葉と、そしてそれらが意味する物との関係だからである。「僕はこれらの岩山のためにどんな比喩でも考案することが出来るだろう」とシュタンゲルは書く。そしてすぐに続けて次のように言う。「しかしこれらの比喩は全く恣意的で、空虚な言葉に過ぎないのだ。」<sup>45</sup>またタラフマラ山地の全体については、「記号の山、そこでは道は空虚に通じ、意味は朦朧と霞む、願望の意味のない分節、その実現の仮象、現実の恒常性と変容性」<sup>46</sup>と書いている。シュタンゲルの言うこの「空虚」は、文化が生まれる空間としてのアルトーの「空虚」と同義ではあり得ない。アルトーによるとタラフマラ山地の奇妙な風景は、人間が比喩を与えるものではなく、自然が「考えを開示しよう」とし、<sup>47</sup> 自ら語ろうとしている結果である。<sup>48</sup> 別言すれば、自然が「岩から形而上学的思考を囁」<sup>49</sup>いているのである。一方、シュタンゲルが見る記号は恣意的な記号として、仮象として意味される物との間に「空虚」という、意味の存在しない空間を作り出す。つまりシュタンゲルはアルトーの足跡を追ってタラフマラ山地に赴き、アルトーが見たものと外見上同様でありながらも本質の異なる記号を見たことになる。シュタンゲルが見た「空虚」は、文字言語がもたらす現前性の「死」または「不在」<sup>50</sup>と、デリダに倣って呼ぶことも出来るだろう。つまり推測されるのは、アルトーの著作、特にタラフマラ山地に関する『タラユマラ』と『革命のメッセージ』に興味を惹かれたシュタンゲルがアルトーにとっての「唯一の場所」を見学に出かけ、結局自分の哲学の立脚点である脱構築理論を再確認した、という

<sup>45</sup> Ebd., S.21.

<sup>46</sup> Ebd., S.22.

<sup>47</sup> アルトオ「記号の山」、46頁。

<sup>48</sup> 前掲書、46頁。

<sup>49</sup> 前掲書、50頁。

<sup>50</sup> ジャック・デリダ(足立和浩訳)『根源の彼方に：グラマトロジーについて 下』(現代思潮社 1972)、272ff.

ことなのである。

言語に現前性の不在が付きまとうように、語り手は「つねに欠けているある場所」<sup>51</sup>を求め、とデリダは述べている。このように物語においても現前性あるいは原初性が喪失されていると考えれば、『唯一の場所』における「空虚」の意味をより良く理解することが出来る。作品中では物語は「空虚な形式」(137)であるとされ、例えばレオ・アフリカヌスのアフリカに関する「時代を超えた語り」は「この空虚」(182)と呼ばれ、モロッコの君主が語る歴史も、「恐怖と空虚を意味に変換させるもの」(220)だとされる。そして、そのような物語が何千年もの歴史において「反復」されているのである。

## 5. 世界の中の「唯一の場所」

次に『唯一の場所』における「反復」という語彙の使用について検討したい。前述の引用箇所では、旅における出発や到着といった行為の「反復」について語られていたが、作品中ではそもそも個々の旅自体も歴史上の何らかの旅の反復あるいは変奏である、とされる。まず作品の冒頭において、「地の果てを目指しての旅という法則は過去の古臭い儀式ではあろうが、どの旅もその反復かヴァリエーションである。本当の旅はただ歴史を通して行われ、この法則を守る」(11)という言葉がなされる。そして歴史を巡る2種の物語において歴史上の様々な旅とその反復について言及がなされ、またレインとカイエの物語においては、二人の具体的な旅とその反復について語られる。例えばレインは、ローマ帝国以来続く二千年の帝国支配の歴史を反復し、「文明の使者」として到来する(198)。アフリカ史においては、王たちの物語がグリオの家系により何世代にも亘って歌い継がれ反復され(6)、それぞれがあたかも自分の時代の出来事であるかのような変奏を施されて伝承される(7)。イスラム教徒たちのメッカ巡礼の旅も反復される旅である(177)。そ

---

<sup>51</sup> デリダ『エクリチュールと差異 下』, 19頁。

して探検隊という存在も、そもそも「集団的な夢から来る」(275)のものであり、大航海時代からイギリスのムンゴ・パークらの時代を経て、探検の精神は反復され綿々と受け継がれていく。ドイツ人のアフリカ学者であるハインリヒ・バルト (Heinrich Barth) とオスカー・レンツ (Oskar Lenz) は、レインやカイエの足跡を部分的に辿って探検を行うが、ドイツ皇帝の命を受けてアフリカを探検するレンツは、時代精神を反映して次第に人種主義的思想に傾倒していき反ユダヤ主義者となる(44)。このようにアフリカという「空虚」を巡って多くのテキスト、多くの旅が反復され、差延を起こし、変奏され、再び集合的な夢となる。例えば作品中では「トンプクトゥ」という名前が時代と場所によって異なる19通りもの方法によって表記されており、「トウアレグ」や隠者を意味する「マラブー」等の単語も複数の表記法で書かれている。このように差延を起こす語彙の中心には不在の「空虚」があり、同様に物語の中心においても「空虚」という現象が生起するのである。カイエやレインの後も集団的な夢から糧を得た多くの探検者たち、つまり「後塵を拝する者の列」(378)が生まれ、冒険が反復されていく。それは誰によっても、どんな場所においても行われ得るので、「この世界こそが唯一の場所」(379)となる。つまり、アルトーにおけるメキシコとは異なり、シュタンゲルにおける「唯一の場所」は反語的な謂なのである。

以上見てきたようなシュタンゲルにおける「反復」はしかし、上述のランガーが主に参照しているドゥルーズの『反復と差異』における「反復」と同義ではない。ドゥルーズにおける「反復」とは、意志をもって行動することであり、<sup>52</sup> また法則に反して法則に優越するような力ビュイサンスの名の下に<sup>53</sup>獲得されるような実存的なものである。しかし『唯一の場所』における「反復」は個々の力能によって獲得されるものではなく、物事の性質に既に備わっている法則的な反復である。つまり語彙の単位で言えば、あらゆる記号に備わってい

<sup>52</sup> ジル・ドゥルーズ (財津理訳) 『差異と反復』(河出書房新社1992年)、26頁。

<sup>53</sup> 前掲書、21頁。

る無際限な反復可能性<sup>54</sup>／反覆可能性<sup>55</sup>とデリダが述べるころの「反復」なのである。その好例は死に関する反復である。カイエはフランスに帰国して僅か10年後に38歳の若さで早世するのだが、それは自分の父親と同様に幼い息子を残しての死であった。その息子も短命の運命にあり、彼らの早世について語り手はあたかも自然律であるかのように「物事はすべて反復でしかない」（403）と説く。この語りは、「アイデア性の現前性も個々の人間も死すべきもの」<sup>56</sup>というデリダの言明を彷彿とさせる。作品はレインの横死とカイエの早世というそれぞれの死の瞬間を以て終わり、作品の現前性も同時に死を迎え、物語は無限の反復性の中に回収される。

以上のような考察によって言えることは、『唯一の場所』という作品が、デリダが脱構築理論で説いたような記号の無限の反復可能性に沿って物語の反復可能性を顕現させる小説だということである。よって問題はシュタングルがドゥルーズ・ガタリイアンかデリダリアンかという次元ではなく、作者が約三千年の歴史物語を語ることによって顕現させようとした理論を、読者として読み取るか否か、ということである。そしてそのような理論を読み取った時、『唯一の場所』は一つの哲学的余論となるのである。

## 6. 語り手の亡霊たち

『唯一の場所』において顕現する物語としての反復可能性はしかし、いわゆる全てを相対化するポストモダンのニヒリズムを醸し出しているかと言うと実はそうではない。この作品が目指しているのは、むしろニヒリズムからの脱却であると言えよう。

特徴的なのは語り手の役割である。この語り手は全能の語り手としての役

<sup>54</sup> ジャック・デリダ（高橋允昭訳）『声と現象』（理想社 1970）、102頁。

<sup>55</sup> ジャック・デリダ（高橋哲哉他訳）『有限責任会社』（法政大学出版局 2002）、279頁。

<sup>56</sup> デリダ『声と現象』、105頁。

割を持ってはいるが、読者に対して「我々」と語りかけ、往々にして現代の読者と共通の視点に立って価値判断を行い、読者に一種の共犯的關係を提供する。レインとカイエの残した記録<sup>57</sup>に基づいて彼らの物語を語る際は主人公の視点に立つが、彼らの視点の外側に立って事物を観察する際は括弧内の挿入文によって解説を行う。このような視点の往来は、直線的な意識による読書を不可能にして読者を逡巡させる要因でもあるが、読者が主人公を客観視しながら同時に彼らに感情移入することを可能にする手法でもある。そして〈他者〉である原住民の声は徹底して間接話法によって再現されるため、彼らが「帝国の視点」により代補されたり領有されたりする可能性は減じ、自立した空間に生きる自立した存在としての〈他者〉の尊厳が保たれることになる。

このような語り手の動きは、シュタンゲル自身がこの作品の解説の中で「幽霊のよう」<sup>58</sup>と形容するものである。それはどこにも確固たる足場を持たず、後世の立場や登場人物の内面を代弁するのでもなく、様々な視点や時間のレベルやそれらの間の両義性や関連や矛盾が露わになるよう、語りの空間を作り出すことを意味している。この語り手は同時に（レインやカイエという19世紀の探検家たちのように）忘却された人についての記憶を呼び覚まし、「英雄や勝者によって歪められた歴史から彼らを解放する」<sup>59</sup>という役割を担っている。またシュタンゲルは、『旅行と幽霊』というエッセイ集に収められた「不在」というエッセイの中で次のように書いている。「失われたもの、減ってしまったものが幽霊のような形式を取って現前化するかのよう、人が形象の背後の無の中に落ちてしまっても、常に形象の中に帰還することが出来るかのよう、自分は形状を取る際には幽霊のような形式を取るよう努

<sup>57</sup> E.W. Bovill (ed.): The journal of Friedrich Hornemann's travels from Cairo to Murzuk in the years 1797-98. (注9参照) ; René Caillié: Journal d'un voyage à Temboctou et à Jenné, dans l'Afrique centrale. 3 Vols. Paris 1830.

<sup>58</sup> Thomas Stangl: »Black speck amid a waste of dreary sand...«. (注15参照)

<sup>59</sup> Ebd., S.272.



めている。』<sup>60</sup>そして自らの努力の目的は、「記憶の場所や行程を描写することではなく、それらを忘却から呼び戻すことである、それ自身が行うかのよう  
にその異質な現実のままに、それを顕現させることである」<sup>61</sup>と述べている。  
推測されるのは、これが恐らくデリダの『マルクスの亡霊たち』と類似の  
精神において書かれているということだ。『マルクスの亡霊たち』は、  
『共産党宣言』、『ドイツ・イデオロギー』、『ルイ・ボナパルトのブリュメー  
ル18日』等においてマルクスが展開している「亡霊学」<sup>62</sup>にデリダが独自の  
解説と省察を加えたものだが、その中でマルクス主義的批判精神は亡霊<sup>63</sup>=  
精神 [= 霊]<sup>64</sup>と呼ばれ、引き継がれねばならない相続遺産<sup>65</sup>とされている。  
それはまた「ここにはいない者たち—すなわち〈もはや〉あるいは〈まだ〉  
**現前してはおらず生きていない者たち**—への正義のためと責任と敬意」<sup>66</sup>（強  
調原著者）を示すためでもあるとされる。恐らく同じ精神において、シュタ  
ンゲルの語り手も「死者に対しては責任がある」（11）と言い、作品の冒頭  
と最後において「破壊の後でそのイメージを回帰させることが出来る。」（13,  
400）という科白を反復する。そして末尾においては主人公たちの死につい  
て語った後、「彼は我々の中に移行した、言葉の中に、無の中に。」（403）と  
締め括る。作品の中で複数回「幽霊のような姿で」と形容される主人公たち  
は、上述のシュタンゲルのエッセイが言うように作品を通して「幽霊のよう  
な形式を取って現前化」した後、作品の末尾で死によって再度消滅してしま  
う。そして彼らが移行する「我々」というのは、「亡霊とともに語る」<sup>67</sup>存在  
としての語り手であると同時に読者でもあり、また幽霊が帰還出来ることに

<sup>60</sup> Thomas Stangl: Abwesenheiten. In: ders.: Reisen und Gespenster, S.14f. (注24参照)

<sup>61</sup> Ebd., S.15.

<sup>62</sup> ジャック・デリダ（増田一夫訳）『マルクスの亡霊たち』（藤原書店 2007）、356頁。

<sup>63</sup> この書物では「亡霊」と「幽霊」という語彙は同義語として共に使用されている。

<sup>64</sup> 前掲書、157頁。

<sup>65</sup> 前掲書、129頁。

<sup>66</sup> 前掲書、14頁。

<sup>67</sup> 前掲書、39頁。

努め、語りを実現させる〔守護〕霊=才能〔génie〕<sup>68</sup>としての作者でもある。

シュタングルによると、歴史の記憶を呼び戻すための努力にはある特別な意欲が約束されている。<sup>69</sup>そして彼は言う、「自分はこの意欲を糧にして生きている。それは死ぬことなく死ぬことであり、慰めが存在しないような現実の死の代わりになる何ものかだからである。』<sup>70</sup>このような意欲により10年の歳月を費やして執筆された『唯一の場所』は、自己言及的に言えば今後も自己同一性のもとに休らうことなく差延を生んで反復され流動する物語である。そしてアフリカ探検を巡る歴史の中で忘却されていた精神[=<sup>エスプリ</sup>霊]を呼び戻すことに見事に成功したという点において、幸運な物語だとも言えよう。

これまで述べてきたように、多層的な物語を脱構築理論に則って、しかも歴史の亡霊が顕現すべく語るという、この作品の独特の困難さが作者による特別な意欲によって仕掛けられたのだとしたら、それを読むことの意欲にもやはり特別な成果が約束されるはずである。そしてこの読みが成功するのであれば、シュタングルが言うようにその努力の成果が現実の死を前にして何某かの慰めを与えてくれる性質のものであることは、間違いないことのように思われる。

【本稿はJSPS科研費15K02400の助成を受けたものである。】

<sup>68</sup> 前掲書、44頁。

<sup>69</sup> Stangl: Abwesenheiten, S.15.

<sup>70</sup> Edb.

## Thomas Stangl

### *Der einzige Ort und Reisen im Gebirge der Zeichen*

Miyuki SOEJIMA

In seinem ersten Essay *Reisen im Gebirge der Zeichen* erzählt Thomas Stangl von seiner Reise in Mexiko, genauer in der Sierra Tarahumara. Er erwähnt auch das Erlebnis Antonin Artauds, der 1936 dorthin reiste und den Ort „das Gebirge der Zeichen“ nannte. Stangls Reise war eine Spurensuche nach Artauds Erfahrung, und als Motto seines eigenen Essays zitiert Stangl ein Textstück aus Artauds *Das Theater und die Götter*. „Sie (=Die mexikanische Landschaft) ist *der einzige Ort* auf der Erde, der uns ein okkultes Leben bietet, und es auf der Oberfläche des Lebens bietet.“ Stangls Debütroman *Der einzige Ort* scheint also, in Anlehnung an diesen Text Artauds entstanden zu sein. Hierbei wird von Interessen sein, in welchem Zusammenhang Stangls Roman mit seiner Reise im „Gebirge der Zeichen“ steht. Dieser Beitrag will dieser Frage nachgehen, vor allem Stangls zeichentheoretischer Anschauung aufgrund der Dekonstruktion, der der gesamte Erzählduktus von *Der einzige Ort* unterliegen scheint.

In der Sierra Tarahumara, also im „Gebirge der Zeichen“, betrachtet Stangl die merkwürdige Landschaft und nähert sich ihr, genauso wie Artaud, mit vielen Metaphern, um sie zu beschreiben. Aber anders als Artaud, der in Zeichen Machtbekundung der Götter sah und die Wiederbelebung der Metaphysik herbeiwünschte, sieht Stangl in allen Metaphern „nichts als leere Worte.“ Darin ist die Abwesenheit der Gegenwart der Ideen zu ersehen, was die Grundlage der Derridaschen Metaphysikkritik ist. Und diese Abwesenheit findet sich auch in *Der*

*einzig* Ort, z.B. beim Reiseziel der Abenteurer, das sich als leer erweist („im Zentrum des Netzes eine Leere, eine Abwesenheit, unter all den Eroberungen etwas, das sich entzieht“, „für uns zum leeren Zentrum aller Sprachbewegungen geworden ist.“) Aber nicht nur Ort und Zeichen werden als „Leere“ bezeichnet, sondern auch Erzählungen und Geschichten („die Erzählung, eine leere Form“). Und Geschichten wiederholen sich („jede der Reisen stellt die Wiederholung und Variation früherer Reisen dar“), indem die *Différance* erzeugt wird (der Name „Timbuktu“ wird in dem Roman in 19 verschiedenen Schreibweisen geschrieben). So wiederholen sich auch Entdeckungsgeschichten, in denen jeder an jedem Ort als Abenteurer treten kann, deshalb ist die Welt nur „ein einziger Ort“. Der Roman *Der einzige Ort* verkörpert als Ganzes die prinzipielle Wiederholungsmöglichkeit des Zeichens und der Geschichte.

Dadurch ist zu vermuten, dass Stangl bewusst im Gegensatz zu Artauds Verteidigung der Metaphysik stand, als er mitten im Gebirge der Sierra Tarahumara stand. *Der einzige Ort* kann also als die Folge von Stangles Erlebnis seiner Mexikoreise gelesen werden. Das war eine konstruktive und konsequente Folge, wenn man bedenkt, dass dieser Roman „das interessanteste Schreibexperiment“ der postmodernen Entdeckungsromane genannt wird.